

ねじりはちまき

9月 長月 白露 秋分の月になりました。

9月1日 防災の日と210日、いっしょです。7日 白露。9日 重陽の節句です。18日 敬老の日。23日 秋分の日。彼岸の中日でお墓参りですね。

白露とは、24節気のひとつで秋分「彼岸の中日」までの期間で、処暑から数えて15日目です。寒暖の差が激しい仲秋へと、季節が移り変わったことを感じさせます。

虫の音が静かに響く月夜に照らされて白く光る露は、しみじみとしたその美しさをたたえ、朝日に照らされると消えてしまうはかなさも趣がありますね。

24節気にはもうひとつ、露が付く節気があります。

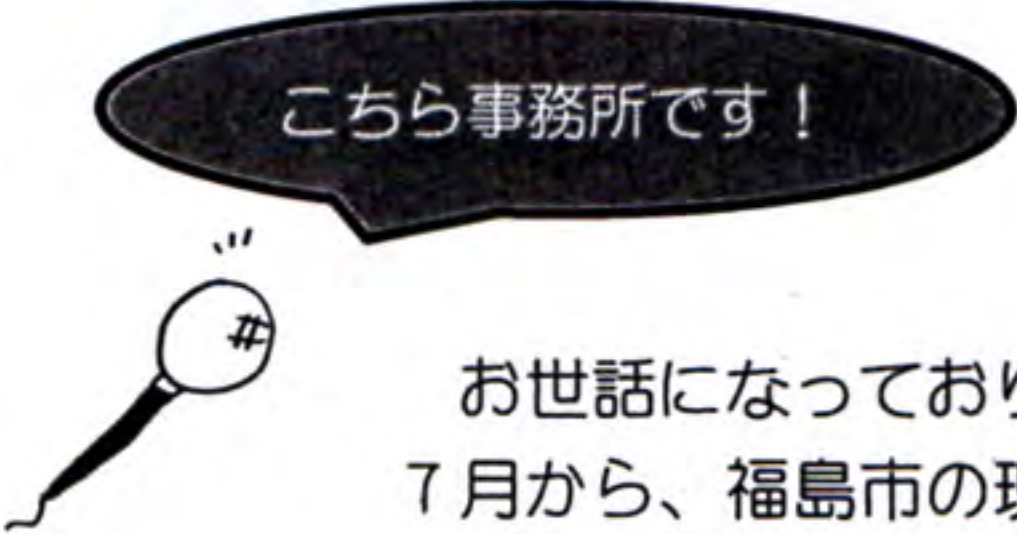
寒露です。白露から数えて30日後にあたります。霜になりそうな冷たい露で、晩秋から初冬の頃に結ぶ露のことを意味しています。

日を増すごとに寒さが加わって来ます。

何卒、お体には十分御自愛下さい。

幸田 常一

.....



こちら事務所です！

お世話になっております。

7月から、福島市の現場に入らせていただいております。また、本宮市の現場ですが、住宅新築工事をさせていただくことになり、つい先日より着工いたしました。

100サイ バンザイ

私の義兄は1917年（大正6年）8月1日生まれで、この日をもって100回目の誕生日を元気に迎える事ができました。100歳の祝賀会には、近親者（兄弟・子供・孫等約20名）が招待され、w市の○ホテルに於いて華やかな祝賀が開かれ、私と家内も参列させて頂き、皆様方と100歳のお祝いをして参りました。

祝賀会当日、100歳のお祝いの金色のチャンチャンコ（○ホテルで準備したもので、帽子付き）を着て扇子を両手で持ち1人で記念写真を撮り、次いで近親者一同の集合写真を撮りました。町役場から係りの方が2名訪れ、福島県知事からの長寿のお祝い状と記念品を、I町の町長さんから100歳の誕生日のお祝いの記念品を頂きました。

更に、町役場の職員が「長生きの秘訣は？」との質問に、耳が遠くなってしまい反応をしない。傍らに付き添っていた長男が、両手を耳元にあて「元気で100歳を迎える事ができた理由は何ですか？」と、大きな声を出したところこれには即座に反応して「病気をしない事だない。」と明確に答えていました。

100歳翁は耳が遠くなってしまった事と、足が思い通りに動かない事を除き元気そのもの。顔の色つやも若者と同じである。長寿の本当の理由は、後を継いで同居している長男夫婦が、親孝行である事が最大の理由であると愚考しております。また、経済的にも大変恵まれており、以前に開いた兄弟会の折、100歳翁は広告や人の噂話を聞き、各種の健康食品や果物を注文して、これを飲み食いしているといっておられたのを思い起しております。年金の額は僅かであるとは思いますが、これを全額自分の為に使って健康を維持しておられるものと思っております。その意味で、経済的に恵まれているものとした理由です。

100歳翁は旧満州で終戦を迎え、旧ソ連軍の捕虜となり2年の間抑留生活をされ、極寒の中空腹に耐えて労役に従事して帰国しました。帰国後は、百姓をしながら土木の作業に従事していたと聞き及んでいます。そして義姉と結ばれ、2児を立派に育て上げました。今回の祝宴も、この2児の発案で実施されたものと理解しております。

若い時に苦労した方は若くして亡くなるといわれておりますが、義兄を見る限りそんな事はないと確信しております。義姉は20数年前に病気で亡くなり、その後は現在も、同居している長男夫婦と孫2人と、5人の生活ですが、夫婦円満。私から見ても、申し分のない立派な家庭を築き上げておられると思っております。また、100歳の祝賀会を開催できるのは、家庭的に心配事がない

事が大きな理由かも知れません。

知事さんからの表彰と居住地の町からの記念品の贈呈、記念撮影（後日、集合写真が送付されてきましたが、祝賀会の参加者全員が幸せそうに写っていました。）の後、会場を別室に移して祝賀会を開き、山海の珍味と地元の銘酒がテーブルに乗り切れぬ程並べられ舌鼓をうちました。また、孫娘から花束の贈呈があり、更に会場となった〇ホテルからも記念品が贈られ、祝賀の会場は大いに盛り上がりました。

我が家への帰りは家内の運転で、今日の祝賀会の事を思い返しながら幸せな気分になりながら、元気に帰宅した次第です。

k・s記

.....

重陽「菊の節句」

9月9日は重陽。
菊を用いて不老長寿を願う
節句なのだそうです。

菊の節句にちなんで、
「菊酒」はいかが？
日本酒に菊を浮かべて。



「菊花茶」で菊を楽しむ。



菊の酢の物、おいしい♡
おひたしもさっぱりしていいですよ。



.....

今月の旬♡食材

「いちじく」

朝夕の暑さもやわらぎ、過ごしやすくなってきました。
いちじくの実が、少しずつ大きくなってきています。そろそろ、収穫してもいいかな？でも、まだちょっと早いかな？といった感じですかね。(*^_^*)

いちじくには、鉄分や食物繊維が含まれています。
また、ポリフェノール類を豊富に含んでいるので、活性酸素を抑え、細胞の酸化を防いでくれる抗酸化作用が高く、美肌や老化防止によいとされています。そのままでも食べられますが、甘露煮やワイン煮にして食べたりします。

収穫が待ち遠しいですね。

<会社近況>

9月に入りました。
暑さもやわらぎ、現場でも作業がしやすくなってきました。
現在は、福島市の現場で、会社様の営業所建設工事をお世話になって
おります。また、住宅新築工事も始めさせていただきました。
こちらは本宮市の現場なのですが、作業を開始させていただいたばかりで、
今は基礎工事の段階です。

事務所では夕方の涼しい時間を利用し、倉庫内の片付けや敷地内の点検、
片付けなどを行っています。

・・・お知らせ・・・

* 9/23(土) 「秋分の日」
お休みさせていただきます。

* 先月末より、大工職人の佐久間弥兄さん(59歳)に来てもらって
います。二本松市在住です。よろしくお願いたします。

今年の夏も暑かったですね。
そろそろ、夏の疲れが出てくる頃かと思えます。
夏の疲れといっても、原因は人それぞれです。
寝不足の人は、十分に睡眠時間を取る。暑くて食欲がなかった、栄養が偏っ
ていたという人は、食事に気を付けるようにするとか、冷たい飲み物が続い
たという人は、常温や少し温めていただくとか、気を付けてあげると体も
次第に元気になっていくように思います。

.....

平成29年 9月5日発行
有限会社 幸田建設
<発行責任者>幸田久美
〒969-1204
本宮市糠沢字八幡1-1
電話、0243-44-3816

<後記>

今年は外孫を連れて本宮市の
花火大会に行ってきた。
初めて観る花火。ドドンッ！
と上がった瞬間からしばらくの
間、固まっていた。これか
らも初めての〇〇が増えて行く
ことでしょう。(事務員k)

歴史を見る目

今回の話題は、歴史を見るに「外圧」といわれるものにスポットをあて、日本歴史の中でどんなものがあるか取り上げてみたい。この場合の「外圧」とは、外国によって「変革」を迫られた場面である。「外圧」には、軍事的なものばかりでなく、文化・文明の流入圧力も含めてみてみたい。これには、外圧によって「扉を開き」、「グローバル・スタンダード」への仲間入りを果たす側面もあったろう。歴史家でもないので大それたことはできないが、最近の世界潮流をみて感ずることがあったので挑戦してみることにする。

先ず、飛鳥時代（前期）である。この時代の人で有名なのは推古天皇の摂政であった聖徳太子である。聖徳太子は小野妹子を「遣隋使」として当時の先進・大国である「隋」に派遣する。屈従するということではなく、敬意を払い、学ぶ必要のある存在であったのだ。その飛鳥時代の実力者が誰かというところ「蘇我氏」なのである。蘇我氏は歴史上「悪者」のイメージが付きまとうが、最近はそのようなことがわかってきた。蘇我氏は時代の「先進者」なのである。朝鮮半島経由の帰化人を掌握して、文字を使い、計算力を駆使し、鉄の鑄造を担い、公共事業を一手に引き受けて、その力は士族の中では群を抜いていたのだ。つまり、蘇我氏の力の源泉は「先進の文明・文化」をいち早く入手したことなのだ。そして宗教面では、仏教にいち早く帰依して、氏寺である「飛鳥寺」を建立した。大国・隋と対等ならんとし、当時のグローバル・スタンダードを手中にしたといえる。それだけに中国の存在は大きかったといえる。その蘇我氏も「乙巳の変」で4代目の蘇我入鹿が討たれて滅びる。そして「大化の改新」の時を迎えるのだ。仏教そのものは、その後も寺院の建立を通してますます治世の要に据えられて、国内に普及していくのである。

次も中国、当時の「唐」との関係だが、遣唐使を派遣するなかで、唐と対等に認められようとして大変な努力をした時代があったので触れたい。それは飛鳥時代（後期）から奈良時代（前期）である。大国に朝貢しなければいけない時代雰囲気があったのだから、これは一種の「外圧」である。では、国家として一人前に認められるにはどんな条件が必要であったのか。当時の認識としては、三種の神器ではないが、「律令の制定」・「史書の編纂」・「都の建設」にあったようだ。歴代天皇はそのために大変な努力を重ねる。律令の制定は法令を整備してそれに基づいて政治を取り仕切ること、史書の編纂は自国の出自・国柄を明確にすること、都の建設は唐の都・長安のような政治を司る中枢にふさわしい格式を備えることにあった。そして、これらについては大宝律令の制定（701年）、平城京の建設・遷都（710年）、日本書紀の編纂（720年）によって陽の目を見ることになる。これ以降日本側は「天皇」の称号を用いることで、あくまでも唐と対等の意識で臨んだが、唐の方でどう思っていたか記録上はわからない。遣唐使の派遣は630年の第一回から約200年に亘り20回（異説あり）に及び、唐の衰退とともに幕を閉じた。

次に時代はかなり飛ぶが、織田信長や豊臣秀吉の安土桃山時代はキリスト教の受け入れ、南蛮貿易の推奨により日本は外に開かれていたが、やがて徳川幕府時代になるとキリスト教は禁止され、数次に亘る鎖国令が発せられて終に1639年に国を閉ざすことになる。そして幕末に至る。日本が目覚められる時が来るのだ。1853年、アメリカのペリー率いる軍艦4隻の浦賀への来航である。これが「開国への外圧」の始まりである。これ以降イギリス・フランス・ロシア・オランダも加わって、幕府に対して先ず「開港」を求め、次に「通商条約の締結」を迫る。その当時、日本には清とイギリスのアヘン戦争（1840～42年）とその結末の情報が入っているし、一方国内世論としては尊王攘夷の声も強い。そういう中で、井伊直弼は「修好通商条約の締結」と「5港の開港」に踏み切る（1858年）。これがまた、天皇の勅許を得ていないことということで問題になる。ご存知の通り井伊直弼は桜田門外で尊王攘夷派の水戸藩浪士たちに討たれてしまう。1865年勅許が

得られて条約は発効するが、それは兵庫沖に4か国軍艦が終結していたのが背景にあったことだった。やがて、日本は開国して富国強兵の明治時代へと向かうのである。余談だが、徳川慶喜が大政奉還した後の江戸城無血開城のこと。実はこれが実現したのはイギリス公使のパークスとアーネスト・サトウの介入・周旋があつて実現したという説がある。本当か。つまり、勝海舟と西郷隆盛の仲に割って入ったという。イギリスとしては中立の立場。この際武器を売りまくろうとする商人グラバーとは違う。仲に立ち入った程度は定かではないが、何らかの形で無益な血を流さないように双方に接触したのは間違いなさそうだ。その方がイギリスの国益にも繋がるとの目論見があつたことだと思う。

さて、明治時代に入つてことだが、文明開化と称して先進国に対等に扱ってもらおうと様々なことを手掛ける。ご承知のように「鹿鳴館舞踏会」のようなものまでやる。ここで取り上げるのは、不平等条約の解消に向けての道のりである。幕末に外圧によって締結した「通商条約」は実は「不平等条約」であつた。その解消のためには、先進国から一人前の国であると認められる必要があつた。先ず1885年に「内閣制度」を発足させる。初代総理大臣は伊藤博文である。伊藤は長州藩時代にグラバーの周旋でイギリス留学を果たしている。そして、1889年に大日本帝国憲法(明治)憲法が發布され、その翌年に第I回衆議院議員選挙が行われて第I回帝国議会が開かれる。つまり、「憲法制定と国会開設」が成る。伊藤博文がイギリスから学んだものが反映された。それともう一つの要素が戦争だ。当時の常識では、戦争に勝利することで国際地位が向上したのだ。我が国は1894~95年の日清戦争で、1904~05年の日露戦争でそれぞれ勝利した。このような歩みの中で1910年までに我が国は治外法権や関税自主権などの不平等を完全に解消出来たのである。明治時代も終り頃だ。ここに至るまでに実に半世紀を要したことになる。

次に、これまで触れた「外圧」とは性格を異にするが、昭和20年の終戦後の「連合国軍」即ち「GHQ」のもとでの諸改革を取り上げたい。この一連の動きはGHQの「押しつけ」ともいわれる。ここでは諸改革の是非を問うものではない。一体占領下(1945~51年)でどんなことがあつたのかその事実を見ておこうというもの。「GHQの五大改革」といわれるものがある。それは①秘密警察の廃止、②労働組合の結成奨励、③婦人の解放(男女同権)、④教育の自由化、⑤経済の民主化が挙げられる。実はこれらの改革は日本国憲法の公布・施行後に着手された。そういう形をとつたのである。①~④までは戦前との比較でイメージが湧くが、⑤については文字面だけではわかりにくいかも知れない。経済の民主化としてなされたのは、農地改革と財閥解体である。そのうち農地改革は地主・小作の関係を廃止し、地主から土地を取り上げ、自作農を創設しようとしたものである。財閥解体は経済を支配してきた三井・三菱・安田・富士などの財閥の弱体化を図ろうとしたものである。そのため、数次にわたり種々策が講じられている。付言しておく、憲法を始め、占領下の改革はすべて我が国が自主的に進めた形をとって進められたのである。

この外戦後の歩みの中では、繊維や自動車をめぐる貿易摩擦があつたり、為替レートの切り上げなどの場面を経て、我が国としての市場開放が進展し、いわゆる経済のグローバル化の波に吞まれていくのだ。しかし、現在、イギリスのEU離脱、アメリカ第一主義を掲げるトランプの大統領の誕生など、今後世界の動きはどうなっていくのだろうか。